岡山県久米南町北庄における地域づくりの推移と青壮年組織

神　田　竜　也

Ⅰ　はじめに

本稿では、岡山県久米南町北庄における地域づくりの推移と背景を、青壮年[1]とその住民組織の動向から考察した。

中山間地域集落では少子高齢化がとくに顕著であり、従来集落や組織が有していた地域資源管理、相互扶助、文化保存、産業、教育・社会活動の機能が低下している。そうした地域では、以上の諸機能の維持・継承または強化が今日的課題としてあげられる。岡山県中山間地域県・市町村連絡協議会編（2009）では、中山間地域の活性化を図るため、集落機能の維持や強化に向けた運営組織・計画づくりをまとめている。この報告では、今後単独で集落機能の維持が困難となる集落を対象としている。深刻な過疎化集落の機能維持については、いずれ多くの中山間地域で懸念される問題となろう。

以上の中山間地域問題を受けて、既存の集落の範囲を超えた地域運営が有効であるとの指摘がある（小田切、2006、2009；作野、2006）。広島県安芸高田市川根地区では、水害を契機とした復興と過疎高齢化に対する将来への危機感から、すでに30年以上も前に全戸加入型の組織「川根地区振興協議会」を結成し、広範な地域発展活動を行ってきた（小田切、2009；夫・金、2010）。しかし、広域的な自治組織において、従来の集落機能をどのように分担しまたは引き継ぐかが課題となる。

本稿で取り上げる事例地域――久米南町北庄も、他の中山間地域と同様に人口減少と高齢化が進行している。しかし、多くの地域で上述した機能が衰退するなか、当地では個々の組織が各機能を有しながら、地域全体としてこれら機能の多くが今日まで維持されている。そうした機能は今日までいかにして維持されてきたのであろうか。乳深ほか（2003）は、集落内の住民組織が衰退するなかで、新設の組織や既存の組織が活動を引き継ぐという、柔軟な対応によって地域づくりが進められてきたことを明らかに

した。ここで注目すべき点は、住民組織は不変のまま継続してきたのでなく、活動衰退時の対応として機能移転がうまくなされてきたことである。以上の着眼点からは、組織や活動の多様性のみに依存して地域づくりを評価するのでなく、基礎研究としての長期間でみた住民組織の整理と理解が求められる。

ところで、筆者と本稿の事例地域とのかかわりは、棚田保全活動の研究を進めることが契機にあった。当地の棚田保全活動では、来訪者との交流とともにリーダーを中心とする内部の結束力が重視されている（神田、2007）。その後、筆者は地域とのかかわりのなかで、そうした動きが棚田保全活動だけでなく、他の地域活動においても同様の傾向にあるのではないかという問題意識を抱いていた。このため筆者は、内発的な地域活動の背景を各組織のもつ充実した諸機能やその継承にヒントを求め、本稿でアプローチすることとした。

また、乳深ほか（2003）において活動衰退や消滅した組織は青年組織であった。筆者は、青年の存在だけが必ずしも地域づくりの基盤ではないと認識している。しかし、活動主体は無論、組織や人である。そのため、青年および壮年の動向が地域づくりとのかかわりをみるうえでの着眼点になると思われ、本稿ではその動向に着目した。

本稿の特徴としては、以下２点があげられる。第１に、地域の諸活動を担う組織を可能な限り情報収集し、各構成と活動の特徴を整理したことである。そうすることで、全体的な動向をふまえつつ、取り上げる主体の位置づけを明らかにできると考えられる。第２に、長期的視点から組織変化をとらえようとしたことである。地域づくりを動態的に考察することで、現状分析にとどまらず、将来の変化対応も含めた分析が可能と思われる。

構成は以下のとおりである。第１に、北庄の住民組織について整理し、戦後から現在に至るまでの青壮年および組織化の動向を明らかにする。第２に、1980年以降に成立した青壮年を中心とする組織――北山神社神楽保存会と北庄愛ランド構想推進委員会を取り上げ、組織および活動の発展と変化を検討する。第３に、地域活動を担ってきたリーダー群の存在について、若干の検討を行う。第４に、交流館事業における完成までの上記委員会のかかわりと、地区全体を包括する組織のゆくえについて考察する。最後に、以上の結果をふまえ、地域づくりの課題と展望を指摘する。

本稿では、筆者自身が活動・行事や総会に出席した際の知見、配布資料、地元住民への聞き取りを検討材料とした[2)]。

II　地域概況

久米南町は面積78.6km^2、県中北部に位置し、北は美咲町（旧中央町）、南は岡山市（旧建部町）に接する。1954年、弓削町、誕生寺村、竜山村、神目村が合併し、現在の町が誕生した。町内の標高は100～500ｍに及び、全体としては吉備高原独特の小起伏の緩やかな山容が広がる。町中央部の平地には、旭川とその支流である誕生寺川が南流し、それに沿う形でＪＲ津山線と国道53号線が南北へ伸びている。町では川柳によるまちづくりに取り組んでおり、町内の誕生寺は法然上人ゆかりの地として知られている。

久米南町も他の市町村と同様に人口と産業構造の変化にともない、過疎高齢化が進行している。人口は1960～2005年の間で77％減少した。2010年現在の人口は5,491である（住民基本台帳）。町全体の人口増減率を①1960～1975年、②1975～1990年、③1990～2005年の３時期でみると、それぞれ26％減、11％減、13％減を示す。各地区別の人口増減率をみると、①ではかなりの開きがある（第１表）。①で増加をみたのはわずか２地区にすぎない[3)]。②の減少率は、総じて①より落ち込んでいない。しかし、③では、減少率が再び大きくなっている。地区別では、町内16地区の③の減少率が②のそれより大となっている。したがって、久米南町では人口減少のスピードは各地区で異なるものの、高齢化率が38％であることから、ここでも人口の自然減が社会減を上回るいわゆる「第２の過疎」の到来が明瞭となってきた。

産業別従事者比率をみると、1970年は第一次産業従事者数が全体の55％を占めていたが、2005年には31％となっている（各年の国勢調査報告）。一方、第三次産業の就業比率は、1970年の27％から2005年には47％へ増加した。この就業者の就業先をみると、久米南町内が従業者の61％を占める。一方、他市町村のうち津山市と岡山市への就

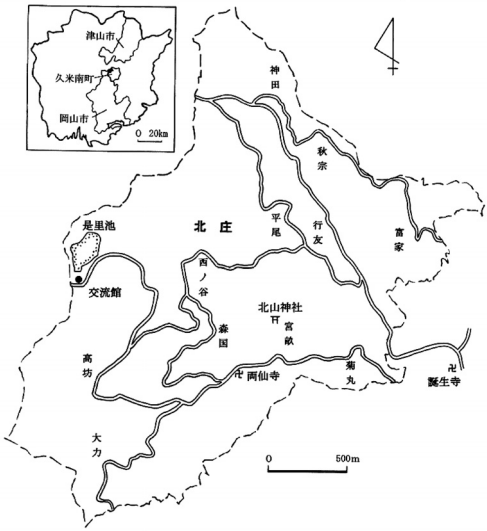
第１表　久米南町における人口増減率の階層別地区数

％＼年	1960～75	1975～90	1990～05
10.0以上	2	1	0
0.0～10.0	0	2	2
△10.0～0.0	0	7	6
△20.0～△10.0	5	7	5
△30.0～△20.0	5	6	7
△40.0～△30.0	8	3	6
△50.0～△40.0	5	0	0
△50.0未満	1	0	0

資料：国勢調査報告による。

業が町外就業者の63％を占め県南北の都市部は久米南町の通勤圏に含まれる。両都市へは交通のアクセスが比較的よく、いずれも１時間圏域の距離にある。他の就業先では、近隣の美咲町（12.7％）、旧建部町（10.5％）があげられる。

北庄は北で美咲町と接し、南庄、里方、山ノ城とともに旧誕生寺村の大字を構成する。当地区は急傾斜の棚田が多く、標高200～450ｍ付近の深い谷やその支谷の斜面、山の稜線部に展開している。棚田は、景観上の美しさや国土保全の観点から1999年「日本の棚田百選」（88ha）に認定された。このような地形的制約から集水域が限られるため、この棚田地域一帯には大小のため池が多い。ため池は明治・大正期の耕地整理事業によって新築・改築が行われ、水路、道路、開田もなされた。北庄は、北庄東（神田、秋宗、富家）、北庄中央（西ノ谷、行友、平尾）、北庄西（森国、高坊、宮畝、菊丸、大力）の３区からなる（第１図、第２表）。当地では通常、上記の区を部落といい、カッコ内のいわゆる小字を小部落という。町の資料によると、2010年現在の戸数は地区全体で115戸、高齢化率は46％に及ぶ（第２図）。



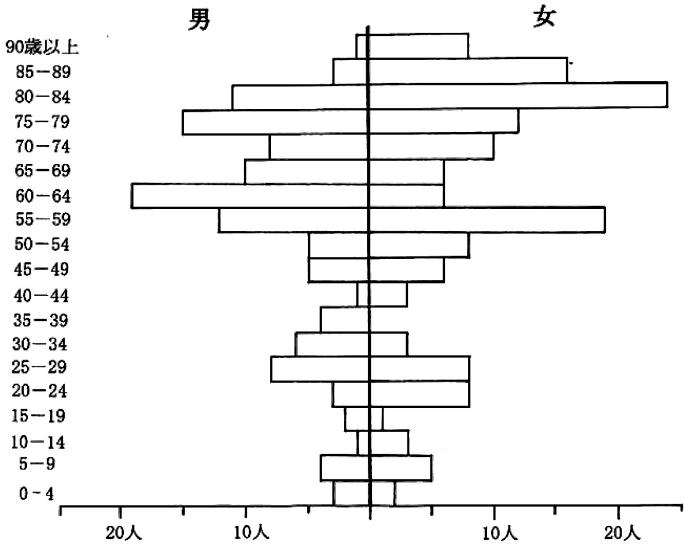
第１図　久米南町北庄の概観図

第２表　北庄地区の人口・世帯数・農家数の推移

（人、戸）

年	1960	1970	1980	1990	2000	2005
人　口	738	534	415	413	317	278
世帯数	153	138	128	124	114	104
農家数			120	101	91	83

資料：国勢調査報告、農業センサス集落カードによる。



第２図　北庄住民の年齢構成（2010年10月）

資料・住民基本台帳人口による。

農業集落カードによると、農家数は1980～2005年の25年間で31％減少した。2005年は83戸、販売農家は74戸であった。一方、経営耕地面積は1980年の123haから2000年の82haへと33％減少した。2005年の経営耕地はデータの制約上販売農家の値で72haであった。農道の未整備や集落から離れた急傾斜地の棚田では、転作や休耕、耕作放棄が急速に進行している。2000年代に入ると、北庄各部落や任意組織が、中山間地域等直接支払制度による集落協定締結と共同の取り組み、地元住民と都市住民との協働によって農地保全を進めている。農業生産では、米以外で施設野菜や大豆があるものの作付面積は少ない。

Ⅲ　北庄の住民組織と青壮年の動向

１）北庄の住民組織の多様性

第３表は、北庄の住民組織について、構成とおもな活動内容を整理したものである。表以外の組織としては、部落長協議会や誕生寺コミュニティサークル（ＴＣＳ）の広域型組織、久米南町公民館誕生寺支館の各種委員会などがある。まず、組織面の特徴として以下５点を言及する。

第３表　北庄住民組織の構成と活動

組織名（戸・人数）	構　成	役　員	組織および活動
北庄各部落	各部落の全戸	A.部落長1、副部落長1、会計1、監査2、(北庄中央の場合、農区長1)、B.2年	北庄中央の場合、年間行事には総会、旅行、料理教室、道路草刈り、交流館の清掃、営農座談会（ＪＡ主催）への出席がある。
農家組合（農区）	各部落の農家	(北庄東の場合、A.農区長1、副農区長1、会計1、監事2、B.2年)	各部落において組織される。農区長は、各農家の細目書を集め、役場に提出する。また、集団栽培の取り決め、管理日誌の記帳を行う。
集落協定組織（中山間地域等直接支払制度）	北庄東31戸、北庄中央37戸、北庄西45戸(2009年)	A.代表者1、会計1、書記1、団地役員4、監査2、B.(北庄中央の場合、2年)	各部落の協定参加者で組織される。北庄中央の場合、農家への直接配分以外の助成（2007、2008年度調べ）は、イノシシ防除用の電気柵購入および設置、道路水路の改修工事にあてられた。
北庄東地域資源保全組合、北庄西地域資源保全向上活動組織	北庄西および東の各部落	不明	農地・水・環境保全向上対策事業の活動組織である。北庄西は2007年度、北庄東は2008年度から本事業による活動を開始。おもな活動は、農業用施設の定期的な点検・清掃、農地や施設への景観作物の作付・植栽がある。
各小部落	各小部落の全戸	(西ノ谷の場合、A.連絡員1、副連絡員1、会計1、B.1年)	部落の下位組織であり、部落からの連絡や調整を担う（行政からの回覧・通達)。草刈り・溝浚い、花見、祠の掃除を小部落単位で実施するところがある。
檀家組	各寺の檀家	A.大総代（各部落1)、組総代（各小部落1)、B.大総代は5年、組総代は3年	北庄には、2つの寺の檀家組がある。総代は各檀家への集金や広報の配布を行う。

組織名（戸・人数）	構　成	役　員	組織および活動
宮講	神社の氏子を形成する各小部落	A.大総代（各部落1）、組総代（各小部落1）、B.1～2年	いわゆる氏子集団であり、北庄内11組が北山神社、北庄東・神田は他の神社の講に属する。北山神社の場合、月に1度、1組が宮の掃除を行い、お神酒を戴く。主要行事のまかない等は、各組を4組とした輪番で担当する。
消防団（誕生寺分団北庄）	13人	不明	町内の消防団には4つの分団（弓削、誕生寺、竜山、神目）がある。おもな活動としては、操法（火災訓練等）、夜警、旅行がある。団員はこの20年間で半減した。
老人会（北庄各部落）	51人（2010年現在、60歳以上の男女）	A.会長1、会計1、事務局長1、地区協議会長（誕生寺区1）、B.2年	誕生寺地区老人会には、北庄の３部落を含む10部落が該当。活動は、グランドゴルフ、カラオケ、詩吟、川柳、短歌などがあり、月2～3回の開催。
婦人会（誕生寺区）	30～70代の女性	A.誕生寺区（会長1、副会長1、幹事）、支部長（各小部落1）、B.2年	老人会と同様で、北庄の３部落を含む10部落が該当。年齢層は多様であるが、高齢層が多い。活動は、小学校運動会、グランドゴルフ、マラソン、敬老会の弁当づくりがある。また、婦人会には有志による加工クラブがある。
虚空蔵菩薩縁日保存会	西ノ谷上・下、森国の全戸（22戸、2009年）	A.会長1、副会長1、会計1、B.2年（3役は各組輪番で従事）	お堂の維持管理、縁日の運営を目的とし、縁日当日は各組（小部落）が輪番で甘酒、スタッフ用のおにぎり、売店を担当する。
両仙寺護法祭保存会	北庄全戸	A.会長1、事務局長1、会計1、各小部落役員1、B.2年	8月14日に北庄西の宮本山両仙寺で深夜にかけて行われる護法祭の保存・運営を主とする。保存会では、毎年1,000円/戸の寄付金を集める。
北山神社神楽保存会	宮講を構成する組	A.会長1、神楽長1、副神楽長1、会計1、B.2年	北山神社の秋季大祭寺に行われる神楽の保存・継承を主たる目的とする組織。秋季大祭は、神社の年中行事のなかでもっとも盛大なイベントの1つ。保存会の構成は、宮講の組であるが、実際は神楽の保存・運営を支える有志である。

組織名（戸・人数）	構　成	役　員	組織および活動
北庄愛ランド構想推進委員会	38人（2007年現在）	A.会長1、副会長2、会計1、監査2、B.2年	北庄内の青壮年や消防団（当時25人）を中心に、1994年の準備委員会を経て結成。メンバーの高齢化が進んでいる。「文化伝承」と「ふれあい親睦」の2つの部会がある（広報部会は廃止、ボランティア部会はふれあい親睦部会に統合）。活動は、祭りの模擬店出展や草刈ボランティアがある。
北庄中央棚田天然米生産組合	19戸（2010年現在、構成員の1戸は北庄以外の世帯）	A.組合長1（会計兼務）、連絡員3、B.とくになし	北庄中央の有志農家によって1994年結成。活動は、棚田減農薬米の栽培と販売、棚田まつり・収穫感謝祭の開催、「田んぼの学校」行事（地元小学校との農作業体験・学習会）などがある。また、2007年からは、地元住民やボランティアによる景観再生活動が開始された。
農事組合法人北庄ファーム	25戸（2010年現在）	A.組合長1、副組合長1、会計1、その他理事2、B.2年	北庄西の集落営農組織で、農作業の協業化を目的に2006年に結成。2010年現在は利用権設定面積21haで、水稲作の受託が中心である。今後は、地場産加工食品の開発、販売を考えている。
各水利組合	各水田所有農家	A.組合長、副組合長、会計等（各組合によって多少異なる）、B.2年の場合が多い	北庄には6つの水利組合がある。各組合においてため池の樋の管理、草刈り、溝浚いが行われる。灌漑期の水管理は水番、ツク番の2つがあり、これらは灌漑域の狭小などが関係する（ツクは池樋のこと）。入れ子状の水利組合が形成され、1戸が複数の組合に含まれる場合も少なくない。
北庄活性化施設管理組合	北庄全戸	A.代表1、会計1、監事3、副代表4、他幹事8、運営委員、B.2年	交流館の管理および活動を目的とする協議会組織。活動は、農業塾、収穫祭、炭焼き、グランドゴルフがある。幹事会とともに、北庄愛ランド構想推進委員会、各部落、老人会、婦人会の各代表者を含めた運営委員会が構成されている。

資料：各組織構成員への聞き取りによる。
1）部落長協議会、公民館分館および各種委員等、他の広域にわたる組織の一部は除く。
2）役員欄のA：各種役員名および人数、B：任期。
3）北山神社の宮講11組は、北庄西の5組（部落）、北庄東の2組（部落）、および北庄中央の4組（西ノ谷は東・西がある）からなる。
4）水利組合の詳細については、神田（2009）を参照。

第１に、北庄東・中央・西の各部落が生活や寄合、共同資産管理の地縁的基礎単位となっていることである。各部落の年間行事としては、定例総会のほか、親睦旅行、花見、収穫祭、料理教室がある。役員について北庄中央の場合をみると、役員の任期は２年であり、重任は妨げない。役員は選挙で決定され、会計から副部落長、部落長へと繰り上げ選出されることが慣例となっている。北庄中央の場合は、農区長も部落役員を構成し、それは実質的な事務作業（細目書作成等）の効率化があげられる。小部落では草刈や祠の参拝・清掃、回覧板通達があり、通達事項は部落役員から小部落の代表者へと回っていく。小部落と同等の単位としては、寺や神社の各講組がある。他に部落をほぼ同一の単位とする組織としては、中山間地域等直接支払制度による協定組織や農地・水・環境保全向上対策による活動組織がある。

第２に、上記の協定組織の農地管理と関係して、北庄西と中央では任意組織――農事組合法人北庄ファームと北庄中央棚田天然米生産組合が成立していることである。前者は2006年に結成され、利用権設定した水田の水稲作を受託している。後者は北庄中央の農家25戸によって1994年に結成され、棚田低農薬栽培米の生産販売、地元小学校との交流体験会を実施してきた（神田、2007）。また、2007年からはボランティアや地元住民との協働による耕作放棄地の草刈り支援活動、2009年からはそれを田植えや稲刈り、雑草管理にまで発展させた天コシクラブの活動も実施されている。北庄の２部落において、農事組合法人の結成による農地集積と農作業の協業化、都市住民による農作業ボランティアは、高齢化および農業低迷下の農地管理対策として対照的な動きである。

第３に、伝統文化に関する３つの保存会があることである。これら保存会を主体とする虚空蔵菩薩縁日、両仙寺護法祭[4)]、北山神社秋季大祭は、いずれも地区を代表する文化行事といってよい。３つの保存会はそうした行事の運営を担うが、組織構成は第３表のように異なる。各文化行事の保存会を結成し運営してきたことから、当地では伝統文化を守ろうとする意識が高いといえよう。

第４に、ため池および水田の水管理を担う６つの水利組合が存在することである。山間棚田地帯では概して集水域が限られる。当地では、用水源の多くをため池に依存し、地域固有の水利が今もなお継続している。当地

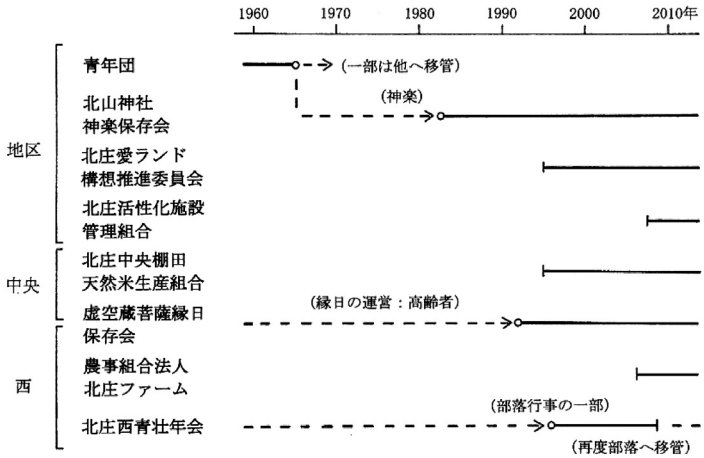
の灌漑域は複雑であり、最上流部の水利組合が流域直下の組合を包含するという入れ子状の組織関係が成立している。したがって、１戸が複数の組合に属している場合も少なくない（神田、2009）。

第５に、青壮年を中心とする組織が結成されており、ボランティアや相互交流などの活動を展開してきたことである。青壮年の動向については、節および章をかえて詳細にみていく。

以上のように、北庄の住民組織は多様であり、個々の活動を展開してきた。これらの活動を機能別にみると、生活扶助、文化保存、教育、地域資源管理、親睦・交流といった地域づくりのための欠かせない要素を多く含んでいる。また、老人会や婦人会を除いて町行政とは距離をおき、地元住民の手で地域づくりが進められてきたことが特筆される。

２）青壮年および青壮年組織の動向

以上の組織概要をふまえ、本節では戦後から今日まで青壮年がどのように地域づくりにかかわってきたかについて概観したい（第３図）。以下では、青壮年および青壮年組織の顕著な動向がうかがえる、①高度成長期ごろの青年団の消滅（1960年代～1970年代）、②町行政主導による青壮年組織



第３図　北庄住民組織の推移

資料：聞き取りによる。
１）組織結成年は不明確（～年ごろ）のものがある。
　図中の○は～年ごろ、または～年代、｜は結成年が明確であることをさす。
２）虚空蔵菩薩縁日保存会の活動主体は、北庄中央・西ノ谷と北庄西・森国が該当。

(1980年代)、③新たな青壮年組織と青壮年の危惧（1990年代なかば）の3点に着目した。

⑴　青年団の消滅

1960年代までは、町内の各地区において青年団が、文化行事等の地域活動全般を主催していた。青年団は15～25歳前後の男女を構成員とし、該当者全員が加入していた。戦時中には地区の青年が学徒動員されるものの、北庄の青年団は戦後高度成長期まで続いた。

青年団が消滅した背景には、青年が兼業化や他産業への従事によって、地域活動のための十分な時間がもてなくなり、その結果地区とのかかわりが希薄となったことがあげられる。戦時中の一時的なメンバー減少や青年団消滅後、これまで主催してきた活動の一部は他へ移管または廃止された[5]。たとえば、誕生寺で8月下旬に行われる地蔵盆（祭りの1つ）はその後寺主催へ移行し、一方で青年団主催であった北山神社秋季大祭の神楽奉納はその後途絶えてしまった。

しかしながら、神楽奉納については、1970年代後半に復興の兆しがあらわれ始めた。すなわち、当時の青壮年有志が中心となり、秋季大祭で一時途絶えていた神楽を復活させたのである。青壮年のなかには、自分たちの代で地区の伝統行事を途絶えさせてはいけないという意識があったという。その後、神楽を伝承するための保存会――北山神社神楽保存会（以下、神楽保存会）を有志で結成した。

青年団は消滅したが、これまでの地域活動のすべてが廃止されたわけでない。行事の一部が移管されたこと、また廃止されたもののなかにも有志によって復興したものがあることが、今日まで続く地域づくりの基盤として指摘できるであろう。

⑵　町行政主導による青壮年組織

1980年代に入ると、町内には各旧町村を構成単位とする町行政主導の組織が結成された[6]。旧誕生寺村域では、青壮年中心の誕生寺コミュニティサークル（ＴＣＳ）が結成された。ここには北庄の青壮年も参加し、ＴＣＳは誕生寺の夏祭り（8月14日）や養護学校の交流会を主催する組織となった。北庄の場合、ＴＣＳ以外としては、消防団や親睦ソフトボール部が1990年代までの青壮年の活動主体であった。

北庄のＴＣＳなどの活動主体においては、ここで培われた団結力や行動力

が、1990年代なかばに結成される青壮年組織の活動の基盤にもなっている。

⑶　新たな青壮年組織と青壮年の危惧

1990年代なかばには、２つの組織――北庄愛ランド構想推進委員会（以下、推進委員会）と北庄中央棚田天然米生産組合（以下、棚田組合）の成立をみた。前者は、北庄の地域活性化を実現することを契機として、青壮年有志によって結成された。一方、後者は、すでにメンバーの多くが高齢であったものの、当時40代であった現組合長が現在までリーダーシップを発揮している。

推進委員会の成立背景には、以下の危惧があった。すなわち、部落の会合では通常イエの代表が出席するため、出席者の世代交代が進まず高齢化してきたことである[7)]。そこで、青壮年が集まる場をつくり、自らの手で地区を盛り上げたり支援したりする必要があった。そのため、推進委員会では青壮年男女の参加を促し、イエの代表とは異なる組織活動を進めようとした。

また、地区内においても、従来の活動や運営のノウハウが次世代へ継承困難となることも危惧されていた。そうしたことから、北庄西では1990年代後半に青壮年を中心とする北庄西青壮年会が結成され、当部落の収穫祭など一部の部落行事を主催するようになった。青壮年会の場合、高齢者と青壮年との距離を縮める試みであったといえる。

部落行事が退職後の高齢者仕事になると、彼らが一斉に引退した場合に運営が円滑にできなくなる。このため、高齢者との距離を縮めたり、意思決定の場を求めたりする必要があった。このように、多様な年代が参画する組織の台頭は、地区の将来を見据えるうえで重要であった。

Ⅳ　青壮年組織における地域活動の継続と変化

１）北山神社神楽保存会

北山神社では、北庄10小部落からなる氏子を擁する（第３表参照）。秋季大祭は、北山神社の行事でもっとも盛大なイベントである。祭り当日は、午前中に輿守（神輿の担ぎ手）の部落において巡回神楽の奉賛があり、これは３部落の隔年輪番となっている。輿守担当の部落へは、保存会会員が２台の軽自動車に便乗して各家を訪問する。以前は各家において料理が振舞われるなどしたが、現在それは少なくなっている。昼食後は、保存会による神楽が奉納される。祭りのメインイベントである神楽の演目は、女子

を舞手とする浦安の舞、通常２人１組となる獅子舞のほか、棒使いや子ども用の獅子舞も登場する。その後、輿守担当の住民がお旅所まで御輿を担ぎ、そこで宮司が最後の祈願を行い祭りは終了となる。

つぎに、神楽保存会の構成と活動について述べる。会員については、現在の数が不明であるが、2003年の総会資料によると、北庄東が15人、中央が12人、北庄西が35人となっている。役員には、保存会会長、神楽長、副神楽長、会計がある。保存会会長は神社との交渉を主とし、神楽長は指導全般、練習日時や会員への連絡調整を行う。会の活動については、例年９月下旬に総会があり、会計報告と事業計画が各役員から発表される。これより祭りまでの２週間余りは、神楽の練習が週３回あり、祭り前日には獅子舞の紙手の交換や神社敷地の幟やテントの設置を行う。以前は、新年会や親睦旅行が実施されたこともあった。

以下、神楽保存会の活動における約30年間の継続背景を、人材面と資金面からみておく。人材面では、会結成当時20～30代であった青壮年が現在活動の核にあり、堅実な運営体制を保持してきたことにある。2010年における中学生以上の神楽参加者をみると、60代１人、50代７人、40代４人、30代１人、20代７人、10代１人であった（第４表）。ここには女性が含まれていないが、神楽保存会の婦人部は祭り当日の出店を担当する。上記50代のなかの６人、すなわちC、D、F、G、H、Ｉは会結成初期から参加し、これまで会の活動を支えてきたとされる。また当時、彼らは地区の子どもたちを積極的に保存会活動へ取り込んだ[8)]。小学生男女の参加は、今日まで子ども神楽という形で続いている。聞き取りによると、その理由は、子ども（小学生）にとって20

第４表　秋季大祭の神楽参加者（2010年）

部落	参加者	年齢	備考
東	A	40代	神楽長
	B	40代	会計
中央	C	50代	
	C息子	20代	町外在住
	D	50代	
	D息子1	30代	
	D息子2	20代	町外在住
	E	40代	
西	F	50代	
	G	50代	
	H	50代	
	H息子	20代	
	I	50代	
	I息子1	20代	
	I息子2	20代	
	J	50代	
	K	20代	
	L	40代	
	M	10代	中学生
他	N	60代	妻の実家：北庄西
	O	20代	Aのおい

資料：参与観察および聞き取りによる。
1）上記参加者は、中学生以上で男性のみを示す。
2）町外在住者のうち、実家が地区内の者は該当部落に含めた。

代の参加者との交遊や、練習の休憩中におやつが出ることなどが楽しみとなっているからである。20～30代の参加者は、上記50代会員の息子たちである。彼らは小学校卒業後不参加となるが、高校卒業後に再び参加した者が多い。また、20代の参加は決して親からの強制や勧めではないという。聞き取りや参与観察から判断すると、伝統行事保存の重要性を認識しているだけでなく、会員相互のコミュニケーション、獅子舞の一体感が関係していると考えられる（写真１）。そうしたことから、現在町外在住で祭日に帰郷する者もみられる（第４表参照）。神楽の参加形態からは以上のような年代の偏りがまとまりの強さとなり、神楽の継承へと結びついている。このことと合わせて、現在40代の人を神楽長や会計にあてていることから、そうした運営体制が徐々にではあるが下の世代へと継承されつつある。

写真１　神楽奉納のようす

奉納順序の最後となる背伸獅子。2010年10月撮影。

資金面としては、活動維持に関係する神楽保存会の会計をみておく。2009年度の会計によると、収入807,011円に対し、支出は187,599円であった。収入の72％は前年度繰越金が占め、他では神社や個人の祝儀が約20万円であった。支出には、おもに模擬店の資材関係や集会時の飲食が主で、衣装や備品の更新は少ない。過去10年間の推移もほぼ同様であり、収入が66万～90万円、支出が18万～40万円内にあった[9]。まとめると、神楽保存会では神社や個人の祝儀の重要度が高く、一方で多額の出費はないため、健全な収支であるといえる。衣装については、浦安の舞の衣装を購入するため、1995年に町の人材育成助成として20万円が補助されたことがある[10]。

神楽保存会は、北庄の住民組織のなかで年代の異なる参加があり、また神楽そのものの演目に限らず、運営体制も若い世代へと継承されようとしている。以上の事例はあくまで地区内の継承事例である。実際、筆者の参与観察によると、民俗芸能の観光発展は認められず、担い手の広域化については、浦安の舞の舞手を里方地区から要請した以外はとくにない。すな

わち、澁谷（2001）が述べるように、民俗伝承の地域活性化機能がコミュニケーション機能に限定されるという点とほぼ同様の傾向を示すといえよう。そうしたコミュニケーション機能を有することから、神楽保存会は内部の結束力を重視してきた北庄の代表的な住民組織である。

2）北庄愛ランド構想推進委員会

⑴　理念と活動

推進委員会は1994年の設立準備会を経て、1995年１月に結成された。その発案者は北庄東のＰであった。その友人であったのちの初代会長Ｑはこれに賛同し、氏が所属するソフトボールチーム（消防団を中心とする）へ働きかけたことが結成の契機となった。その背景には、前述した点とともに、当時地区の高齢化率が35％で人口減少を憂い、Ｑの「できるときに、できることを、できるだけ地域にお返ししよう」と地域を活性化することにあった。その活動の理念を推進委員会では、①生活・生産基盤の向上、②地域コミュニティの推進、③伝統文化の保存、④都市・農村の交流の４点を掲げた。具体的に示すと、ボランティア精神の育成、会員内地域内の親睦を図ること、地域の文化の保存と継承、地域活性化のための事業推進であった。その活動推進を図るため、推進委員会では４つの部会を発足させた[11)]。以上の部会は、1997年からふれあい親睦部会、文化伝承部会、企画推進部会とあらたに広報部会を加えた体制となった。以下、その活動をとくに2000年代なかばまでを中心にみていく。

写真２　独居老人宅の奉仕作業

推進委員会の会員による雨桶の修理。撮影年月は不明だが、聞き取りでは1995年ごろとのこと。

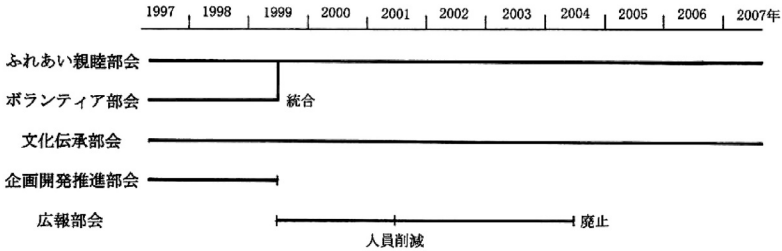
ふれあい親睦部会は、独居老人宅奉仕作業やグランドゴルフ大会の企画を推進した。前者は、ボランティア精神の育成にかかわり、委員会独自の活動であった。内容としては草刈、枝打ち、剪定、雨樋修理（写真２）などがあり、こ

うした活動は高齢者に対してたいへん好評であった。後者は、毎年８月に実施され、会員の子どもの多くが小中学生であったので、家族の参加が多くみられた。この大会には、（財）簡易保険加入社協会のかんぽ健康増進支援事業の助成を得て実施された。また、特筆すべき活動として、1997～2001年の５年間実施されたいちょうリレーがある。これは、奈義町菩提寺の銀杏の枝を参加者がリレーして久米南町誕生寺（約42㎞）まで運ぶという企画であった。2002年以降は、ランナーの確保が困難となったため中止されている。文化伝承部会は、護法祭や誕生寺地区の夏祭りにおいて模擬店を出店していた。これに関して、会では町の健康フェスティバルやぶどう祭り、道の駅の棚田まつりにおいても出店を行っていた。企画推進部会は、地域の活性化プランを町行政や町議会へ提言・要望し、実現することを目的とし、この企画はのちの中山間地域総合整備事業へとつながることとなった。広報部は、「愛ランドニュース」を定期発行していた。

推進委員会は、以上のように地区内のボランティアおよびサポート的役割を果たす機能集団となった。会の設立発起人であった８人は、神楽保存や他の地域活動においても従来からリーダー的役割を果たしてきた。とくに、初代会長であったＱの存在は大きい。Ｑはいちょうリレーの発案者であり、会長職を３期つとめた。また、従来の青壮年活動が消防団や一部の人たちに限られていたのに対し、推進委員会の特質はこれに含まれない女性への参加も促し活動してきたことにあった。女性による地域活動の参加といえば、婦人会などの公民館関連の活動が主であった[12)]。そうした参加促進の背景には、以前からの近所付き合いだけでなく、ＰＴＡ活動やスポーツ少年団との親同士のかかわりも大きいとされる。

⑵　会員の減少と高齢化

ここでは、組織構成および活動の変化についてみていく。2000年以降、委員会の部会は統合廃止がなされた（第４図）。企画推進部は、地域活性化構想の要望を正式に町が受け入れ、当初の目的を達成したので廃止となった。広報部では、2001年に人員を削減し、2004年には正式に廃止となった。これは活動が他の部会よりも少なかったことがあげられる。また、ボランティア部会はふれあい親睦部会と統合され、2004年以降は結成当初の４部会が２部会となって現在に至っている。部会の変更については、総会での議論によって決定されるが、その背景には活動の中止や会員の減少も関係



第4図　北庄愛ランド構想推進委員会の部会の推移

資料・総会資料による。

している。

総会資料によると、会員は1995年74人、1996年61人、1999年44人、2001年45人、2004年37人、2007年38人となっている。会員減少の直接的な要因は、高齢化による離脱と、新規会員の入会が円滑に進まなかった点にある。前者については、推進委員会の結成時、年齢の幅が33歳～50代前半であった。委員会では、規約において年齢制限を設けていないため、会員のなかには2000年代に入ると60代となった。後者については、会を主導してきた年代を含む、現50～60代前半が地区内に多いことに対し、40代がきわめて少ないことが関連している（第2図参照）。したがって、推進委員会が新規会員を募りたい意向があるとしても、対象となる年代の人数が限られていた。

活動の中止について、以下の2例をみる。グランドゴルフ大会は、会員だけでなく子どもの参加も多くあったものの、子どもの成長につれて参加者の減少が生じてきた[13)]。神楽保存会の場合と同様に、地区や推進委員会ではできるだけ地域の子どもとの交流の場をもとうとする意向があった。また、当地区には、子どもの自立を育む子ども会等の年齢階梯組織が存在しなかったことも関係している。当大会は、上記助成を運営費にあて、その一部を参加記念品や入賞による豪華な賞品購入に利用できた。その補助の終了とともに大会が中止されているため、この運営費の獲得も活動の存続に関係していた。独居老人宅奉仕作業の中止については、会員のなかで「独居老人の息子が手伝わないのに、なぜわれわれがしないといけないのか」という雰囲気が生じてきたことにある。推進委員会結成当時の強いリーダーシップと比べて、2000年以降は理念が会員間で薄れていき、さらに会員の減少によって意見調整も困難となってきた。

以上の傾向は、推進委員会の会計にもあらわれている。委員会では収入部門に１人1,000円の年会費や祝儀をあててきたが、活動が少なくなっているため、2007年の収入支出ともにかなりスリムとなっている。すなわち、収入の場合、2001年度までは100万円/年を超えていたものの、2002年以降は60万円前後で推移している[14)]。

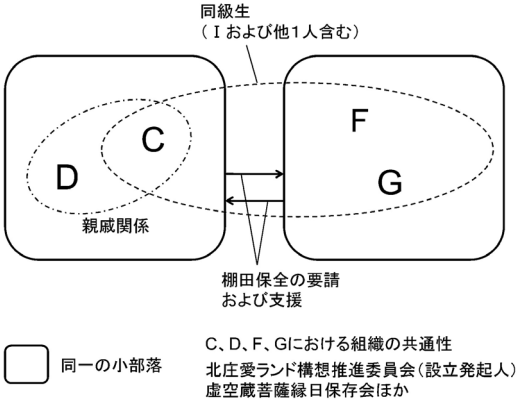
2010年現在の活動は、模擬店の出店の協賛関係が中心である。推進委員会結成からの約10年間は会員間の強いリーダーシップが発揮されていたが、その後は会員減少や理念の希薄化および高齢化への対応が困難であった点などから活動が縮小傾向にある。

Ⅴ　地域づくりの推進力

ここでは、地域活動を担ってきたリーダー群の存在を取り上げる。推進委員会は、2000年代後半から活動が縮小傾向にあるものの、これに属するリーダー的存在の人々が他組織の役割までも失ったわけでない。まずはこのことを留意しておきたい。

組織間の関係についてみると、推進委員会は他との連携において文化行事の模擬店出展にかかわってきた。それを可能としたのは、組織間で中心となるメンバーが重複していたからである。したがって、その核に含まれない人々をうまく推進委員会の活動へ引き込むことができた。その推進力として50代の人々――とくにここでは第４表に示すC、D、F、Gに注目したい。

地域活動中心層の組織および人間関係は、第５図のようになる。まず、部



第５図　地域活動中心層の組織および人間関係

注）アルファベットは第４表に対応。

落との関係ではＣとＤ、ＦとＧが同一の小部落に居住している。注目すべきは、Ｃ、Ｆ、Ｇ、Ｉ、および推進委員会２代目会長の計５人が同級生であり、うち３人は居住の小部落が隣接し、幼少期からの結びつきがある。ＣとＤとは親戚関係にある。

委員会では、彼らがその結成の発起人であったことは単なる偶然ではない。すでに、この当時から地域活動において、青壮年のリーダー的な存在となっていたことがあげられる。ＣとＤは棚田組合に属し、その活動である休耕地の草刈には隣接する小部落のＧとＩも出席することがよくある。それは、棚田組合の単なる要請だけでなく、前述したパーソナルネットワークも関係していると思われる。また、彼らの組織としてのかかわりは、両小部落が虚空蔵菩薩縁日の行事も主催しているため、地区内でもとくに行事が多い。そのうえ、推進委員会や棚田組合とあわせて、彼らは以前よりも地域活動の多くを担っている。

以上のリーダー群を含む現在60歳前後の人々は、自らが担当する村仕事や役職の負担が増加している。すなわち、推進委員会の結成時40代であった者はまだ親が部落等の地域資源管理を担っていたものの、親が引退しそれを現在自らが担当するようになった。また、第５表に示すように、当地区では組織の多さから、50代後半では１人が複数の役職についていることは珍しくない。たとえば、北庄中央部落の役員は、50～60代である場合が通例となっている。

第５表　地域活動中心層の役員就任状況（2011年２月現在）

氏名	役職
Ｃ	北庄中央・副部落長、集落協定・会計、北庄愛ランド構想推進委員会・副会長、北庄中央棚田天然米生産組合・組合長
Ｄ	北庄中央・農区長、北庄愛ランド構想推進委員会・会長、中部水利組合・副組合長
Ｆ	北庄西・部落運営委員、宮総代、北庄愛ランド構想推進委員会・副会長、赤田池水利組合・組合長
Ｇ	寺総代、虚空蔵菩薩縁日保存会・会長、護法祭保存会・会長

資料：本人への聞き取りによる。
注）氏名のアルファベットは第４表に対応。

Ⅵ　交流館の整備計画と北庄活性化施設管理組合

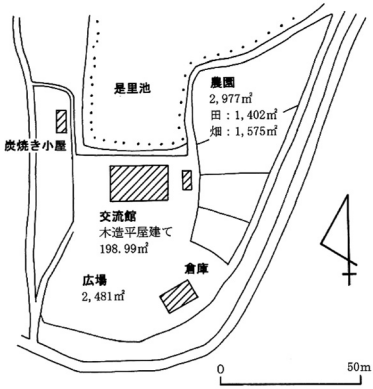
北庄では、2007年に中山間地域総合整備事業による交流館「棚田の里・北庄」（以下、交流館とする）がオープンした。この事業計画には推進委員

会も深くかかわってきた。この交流館建設とともに、それを管理するための地区全戸からなる北庄活性化施設管理組合（以下、管理組合）が結成された。交流館完成までの推進委員会の果たした役割と、地区全体を包括する組織のゆくえについて考察する。

まず、交流館完成までの経過について説明しておく。発端は、1989年、町が「久米南町ふるさとづくり」において、アイデアを募集していた際、北庄３部落長が「是里高原開発について」という構想を町の企画財政課に提出したことにあった[15)]。これは、現50～60代の親の世代が考えていたもので、交流館やゾーンの開発構想であった。その後、推進委員会の結成とともにこの開発構想が浮上し、「都市と農村の交流」が会の理念の１つに位置づけられた。これは「高坊山・是里池周辺開発」と題する要望書にまとめられ、調査設計、用地先行取得の経費や予算化への趣意が示されていた。

1997年には、町議会員、３部落長、推進委員会の会長、副会長、会計を構成員とする「北庄地域活性化計画委員会」が結成された。委員会は、1999年３月に「是里池周辺の自然を活かした環境整備」を立案し、活性化計画を町行政に提出した。行政側では、計画審議と予算折衝を行い、一方、地元側は計画問題点の協議、地域に対する計画内容の浸透と協力体制の確立を進めた[16)]。そして、この計画がのちの中山間地域総合整備事業の採択へとつながっていく。

構想段階からじつに18年を経て交流館が完成した（第６図）。以上の経緯において評価されるべき点は、計画立案段階や実際の事業推進過程におい

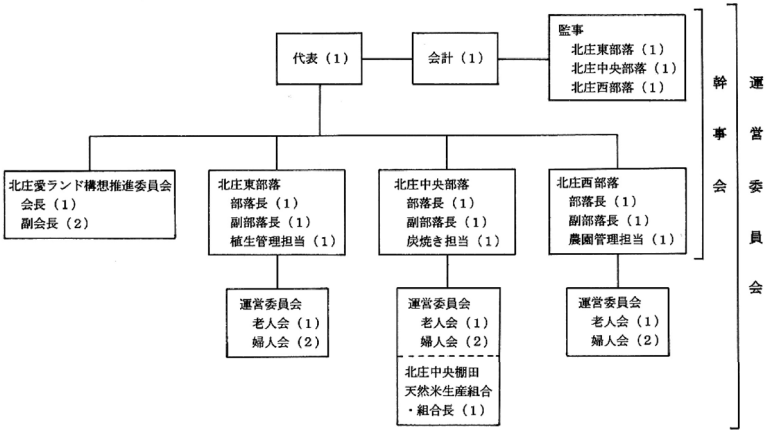


第６図　交流館「棚田の里・北庄」の模式図

資料：交流館資料による。

て、何度も地元住民が議論を重ねた点にある。すなわち、行政主導ではじめから都合のよい、助成規模にあった設計を持ち込んで建設するのでなく、住民の意見も総合したうえで計画が進められたのである。このことは、議論のすべてが計画に直接反映されたわけではないものの、北庄地区がこれまで住民主体で地域活動を進めてきた点とあわせて特筆される。

つぎに、交流館完成とともに結成された管理組合の構成と活動について検討する。管理組合は原則北庄全戸を含む広域型組織であるものの、今日、全国的に注目を浴びている手作り自治区（小田切、2009）や協議会系組織とは異なる。すなわち、あくまで施設の管理運営を第一義的とし、多くの自治機能をカバーした組織ではない。運営体制については、管理組合代表と会計、および各部落の長、副部落長からなる「幹事会」と、北庄愛ランド構想推進委員会、老人会、婦人会の代表者を含めた「運営委員会」が組織されている（第７図）。運営委員会の構成組織に推進委員会をおくのは、やはり前述したように交流館の計画を住民の中心となって議論してきたことや、今後の地域づくりにおいては青壮年の協力が欠かせないことが前提となっている。



第７図　北庄活性化施設管理組合の組織図

資料：交流館資料による。

おもな活動としては、都市住民を対象とした農業塾の開催（春から秋までの月１回、サツマイモの植付、そばの播種）、収穫祭、炭焼き、北庄杯グランドゴルフがある。交流館の主たる目的が、農業塾やそれに付随する収穫祭にみる都市と農村の交流であるものの、参加者数は少なく2010年は中

止された。炭焼きについては、高齢者を中心に有志の部会が結成され、交流館横には炭焼き小屋が造られた。炭焼き部会では、交流館活動とは異なる月数回活動し、炭の販売も行うようになり、そこには相互交流の場が形成されつつある。交流館の通常管理としては、月１回、各部落が持ち回りで清掃活動を行う。

つぎに会計についてみる。収入のうちの助成には、町からの運営補助40万円と各部落の負担金計15万円がある。初年度は、完成の記念式典等や新事業の立上げで収入支出ともに多額（各々2,252,823円、1,550,906円）となっていたが、のちはいずれもスリムになりつつある。

交流館建設は単なる「ハコモノ」の整備ではなく、地区にとっては大きな画期を示すものであった。今後の運営体制については、以下の課題があげられる。第１に、管理運営の主体がイエの代表のみに限定されないかという点である。それは、３部落を基盤としているため、管理組合とのかかわりが部落活動の延長とみなされるからである。その結果、活動が高齢者層に偏ることが懸念される。高齢社会に突入するなか、地区内でそれに対応した組織運営と地域づくりが必要となってくる。ここでは、炭焼き部会のような高齢者組織の活動が評価される一方で、管理組合全体としては老若男女への参加をいかに促すかが課題となろう。第２は、行政との距離をおいた柔軟な運営である。すでに述べたように、交流館建設の第一の目的は都市との交流にあった。このことには行政、地元住民双方に異論はないが、必ずしも民意が反映されたわけでない。すなわち、活動は儲け主義を前提としてはならないことであった。ここに少なくとも行政側と地区（その一部）とのズレがあったとみられる。このため、完成後の数年間において地区は、行政と一定の距離をおいた活動を展開してきたとはいえ、その目を意識せざるをえなかった。しかし、2010年現在、急転して利益追求が認められつつあり[17]、今後は交流を含めた地域経営主体としての力量が問われることとなろう。

Ⅶ　おわりに

本稿では、岡山県久米南町北庄における地域づくりの推移と背景を、青壮年の動向に着目しながら考察した。

地域づくりについては、機能の補完や継承が継続性にも深くかかわり、

組織が有していた機能をいかに他の組織に引き継ぐかが課題となる。北庄において戦後、青壮年と地域とのかかわりに変化が生じたのは、青年団が消滅したとされる高度成長期ごろであった。これまで主催してきた活動の一部が他へ移管または廃止された。その後、1980年代に町行政主導による広域型の青壮年組織が結成され、ここでは団結力や行動力が培われて1990年代の活動の基盤にもなった。また、当時の地区内では、従来の活動や運営のノウハウが次世代へ継承困難となることも危惧された。1990年代なかばに結成された推進委員会や北庄西の青壮年会は、青壮年が集まる場をつくりみずから意思決定を行い、地元住民主体の組織活動を進めた。

本稿では、青壮年組織のうち神楽保存会と推進委員会を取り上げ、活動の発展と変化を検討してきた。神楽保存会は当時の20～30代の有志を中心に結成され、今日まで保存活動が継続している。活動の中心層の果たす役割は変わらないが、下の世代へは神楽の演目のみならず、役員も40代をあてることで運営体制も継承が進んでいる。神楽保存会のほか、虚空蔵菩薩縁日の運営も対象の小部落全戸へ移管された経緯があり、伝統文化とその保存体制の継承はなされているといえる。

一方、推進委員会では、2000年代なかばまで理念をもって相互の交流や高齢者のボランティア、祭りなどの協賛を通じて活動をしてきた。2000年代後半になると、新規会員の加入がみられず内部の高齢化が進行した。高齢者へのボランティアやグランドゴルフなどの会員間の親睦を深める活動は、そうした状況の変化とともに停滞した。すなわち、組織内での理念や活動、これらにかかわる運営体制の継承は円滑に進んでいない状況である。神楽保存会の場合と異なり、人員確保の面から若い世代にどう受け継ぐかが難しくなっている。しかしながら、推進委員会では、後述の交流館における事業推進過程の議論や、その後の運営体制の構築にかかわってきたことで、「地域活性化のための事業推進」の理念についてはおおむね継承されたとみられる。そうした地域活動の推進力としては、50代（調査時）のリーダー群の存在をあげることができる。

地区では、2007年に多目的利用のできる交流館が完成した。これまで内部の結束力に重点をおいた地域づくりは、管理組合の場合、炭焼き部会に代表されるように相互交流の場が形成されつつある。一方、交流館の主目的である都市との交流については、参加者の獲得に課題を残している。今

後の運営体制としては、交流館の管理運営の主体がイエの代表に偏るという懸念からさまざまな年齢層の参加を促すこと、行政との距離をおいた住民主体の柔軟な運営があげられる。

地域づくり全体に関して、高齢化への対応と人員の確保という点から展望を述べたい。今後は、青壮年組織を離脱し老人会へ加入する人も出てくるだろう。高齢化を理由に各組織に所属しなくなると、その人の老後は無為な時間をすごすことにつながり、またそれは地区にとって地域づくりの発展を停滞させることとなろう。人員確保の方策を人口流入に求めることは、町の施策とも関係するため、たやすく達成できることではない。ここでは、わずかであるが当地区でもみられているＵ・Ｉターン者を地域活動に取り込む努力が今後も必要である。補足ながら人員の確保について述べると、本稿で議論の焦点にしなかった棚田組合は会員の平均年齢が70歳に至っているものの、参加者は10年前と比べ変化している。すなわち、棚田組合の組合員は減少傾向を示すなかで、Ｕ・Ｉターン者や現組合員の親戚が参加するようになった。現在、田舎暮らしがブームとなるなか、３戸の当地区へのＩターンがみられる。そのうち１戸は早くから地区の行事へ積極的にかかわっており、棚田組合にも参加している。棚田組合の結成当時の規定によれば、棚田米生産（低農薬栽培米）が必須となっていたが、最近ではその規定に必ずしも合致しない配慮がとられるようになった。棚田組合に限らず、青壮年組織や他の組織においても、いつでも組織に参加できるような体制をとり、このための敷居を高くしないことがのぞまれよう。

また、地域活動の継承には、組織の継続性だけでなく、機能の他への移管もあわせて考えることがのぞまれる。一部の地域活動が継承されているなかで、活動縮小化にある推進委員会は、岐路をむかえているといえる。そこには組織内だけでなく、多様な主体や人々の議論が必要となるのでなかろうか。推進委員会の会員はすでに地域づくりの実績を有するため、この経験を活かした活動が鍵となろう。

本稿で明らかにした内容の早急な一般化は謹まなければならない。だがここで強調しておきたいのは、高齢化＝集落の限界化へと結びつけ、それを数字のみで判断する論調が多いなか、数字にはあらわれない地元住民の実態にも目配りすることである。筆者は、地域活動やそれを担う組織の変化のなかに、地域が存続するための対応や、活性化の芽を育てる指針を得

ることができるのでないかと考えている。本稿はそうした試みの１つともいえるが、他地域の事例にも精通することが今後の課題である。

［追記］2002年の訪問以来、公私共にいつも支えて下さった北庄の皆様には感謝の念に尽きません。末筆ながら、心よりお礼申し上げます。本稿の骨子は、2011年地域地理科学会大会（岡山大学）で発表しました。

注

1）本稿では、青壮年を「20～50代までの男女」の意として用いる。また、20代（および10代後半）をさす「青年」を用いる場合がある。

2）筆者は2002年から現地調査やボランティア活動で当地区をたびたび訪問している。本稿の分析資料の多くは、とくに2008年からの約３年間の収集によるものが多い。

3）そのなかの１地区は、県立養護学校の開校が関係している。

4）護法祭は、百年余りの伝統を誇る「天下の奇祭」であり、現在は美咲町両山寺、久米南町両仙寺、同清水寺の３ヶ所で行われている。この祭りでは、真夜中に祈りつけによって、護法善神ののり移った護法実（ごほうざね）が、境内を飛ぶように駆け回り、「天下泰平・五穀豊穣・無病息災」を願うものである。

5）地区の長老によると、虚空蔵菩薩縁日の行事は戦時中まで担当小部落の青年が主催していた。戦時中は学徒動員のため、部落の老人有志が主催するようになり、この体制は1980年代まで続いた。その後、部落全体で保存会を結成し、現在の体制となった。

6）住民サイドから体育文化事業の開催については、助成の申請があるものの通常個人では受けることができない。その受け皿をつくり助成等事業を円滑に進めるため、行政主導によって各組織が結成された。

7）聞き取りによると、北庄西ではとくにその動きが顕著であった。

8）聞き取りによると、当時のこの年代に幼少の子どもがいたという境遇も、参加促進に関係している。

9）ただし、2003年、2004年、2008年のデータは未入手である。

10）町では、宗教行事に関する助成を実施できないが、ここでは文化伝承を目的とすることで助成を受けることができた。また、条件付で北庄以外へ神楽奉納や指導の要請があった場合は、それに応じなければならない。これまで神楽保存会では、町内他の祭典や指導、展覧会での公演を行っている。

11）ボランティア活動を通じ北庄の愛をはぐくむ部、北庄地域のふれあい親睦を強化促進する部、地域の文化を保存伝承し以って人間の歴史を考える部、地域活性化事業の企画開発を推進し以って自然との調和を考える会の４部会であった。

12）婦人会は現在のような高齢女性中心でなく、1990年代までは若妻の参加もみられていた。

13）1995年のスポーツ安全協会の登録は72人であった。その内訳は、10歳以下が15人、11～20歳が32人、21～30歳が１人、31～40歳が13人、50歳以上が11人であった。以上から、親睦目的のスポーツ大会では子どもの参加が多かったことがわかる。

14）いちょうリレー等のイベントに対する町の助成は、別会計で処理されている。

15）募集要項によると、優秀なアイデアについてはふるさと創生事業として実施することを検討するとの記載があった。

16）存在するデータとしては、1997年に29回、1998年に26回の会合があった。

17）2010年総会での組合長の発言による。

文　献

岡山県中山間地域県・市町村連絡協議会編（2009）：『晴れ晴れ地域づくり羅針盤―新たな地域運営組織の取組の手引き―』．岡山県中山間地域県・市町村連絡協議会、53ｐ．

小田切徳美（2006）：地域づくりの論理と新たな展開．小田切徳美・安藤光義・橋口卓也『中山間地域の共生農業システム―崩壊と再生のフロンティア―』．農林統計協会、pp.165-207.

小田切徳美（2009）：『農山村再生―「限界集落」問題を超えて―』．岩波ブックレット、63ｐ．

神田竜也（2007）：棚田保全活動の展開とその役割―岡山県中北部の２集落を事例として―．人文地理、59-4、pp.332-347.

神田竜也（2009）：岡山県久米南町北庄における棚田のため池灌漑システム．棚田学会誌、10、pp.53-63.

作野広和（2006）：中山間地域における地域問題と集落の対応．経済地理学年報、52-4、pp.264-284.

澁谷美紀（2001）：現代の民俗芸能―農村地域における伝承活動と地域活性化―．農政調査委員会編『日本の農業　あすへの歩み220』．農政調査委員会、pp.1-74.

乳深真美・千賀裕太郎・中島正裕（2003）：農村集落における集落内諸集団と集落活動の持続性に関する基礎的研究―滋賀県甲良町北落集落を事例として―．農村計画論文集、5、pp.235-240.

夫　惠眞・金　科哲（2010）：過疎山村における住民組織の自治機能の維持―広島県安芸高田市川根地区を事例に―．人文地理、62-1、pp.36-50.